# ふるさと見て歩き 第137回

## 長倉城下の地名散策

地名は、昔を知るとても重要な手がかりです。中でも長倉地区は、中世の宿（町・集落）の形をとても良く残しています。地名をたどりながら、ちょっと昔の様子を想像してみましょう。

国道123号から桜並木の坂を上っていくと、「①宿尻（しゅくじり）」という地名があり、ここが長倉宿の「尻」であることがわかります。突き当たりの道が、長倉のメインストリートです。南側の川沿いの平地は、宿の下の町という意味の「②下宿（したじゅく）」という地名です。すぐ傍を流れる那珂川は、当時水上交通の大動脈であり、多くの川舟からの荷が行き交う賑やかな町だったことでしょう。

「③石町（いしまち）」は穀物を扱う商人のいた地区と言う意味で城下町などによく見られる地名です。「④橋場（はしば）」は、那珂川の「渡し」に携わる人達に関係がありそうです。

「⑤北野天神社（きたのてんじんしゃ）」は「天満神社」の敷地にあたります。この神社の本殿は、市内で1、2を争うほどの豪華な彫刻が施されている、知る人ぞ知る有名な神社です。

町場の中心である「⑥仲町（なかまち）」、「⑦上町（かみちょう）」の左右には、「⑧古愛宕（ふるあたご）」や「⑨鹿島小路（かしまこうじ）」といった、神社に関係しそうな名前が見られます。昔はこのように、多くの寺社が町を守るように配置され、人々の暮らしと共にありました。

北側は城の区画になります。お城と町を区切る堀は今は埋め立てられていますが、かつては深い天然堀があったと考えられます。城の東西には「⑩大岩寺（だいがんじ）」「⑪川崎蒼泉寺々中（かわさきそうせんじじなか）」とあり、大岩寺は残っていませんが、蒼泉寺は今もあり、中には貴重な文化財をいくつも所蔵しています。

本城の手前には領主一族や家臣達の住居がある場所を表す「⑫館（たて）」「⑬館旧庭跡（たてきゅうていあと）」という地名があり、その奥にそびえる山が、長倉宿のシンボル長倉城です。地名もそのまま「⑭御本城山（ごほんじょうやま）」。大きな竪堀（たてぼり）と無数に連なる腰曲輪（こしぐるわ）は圧巻で、永享７年(1435)足利幕府が佐竹一族の長倉義成を追罰する軍記物語『長倉追罰記』によると、６千余騎に取り囲まれても落城しなかったとされています。鎌倉公方足利持氏が差し向けた大軍勢、岩松、山内、前橋、江戸、品川、小田、結城、宇都宮等々の各将達が城を取り囲み、その家紋を印した旗が四方を埋め尽くしたそうです。なんと、小川を挟んで東側には「⑮那須陣（なすじん）」という地名があり、これは「東ハ那須ノ一党…」という記述に符合しています。あそこが那須氏が陣を張った場所なのかな？といった想像をしながら景色を眺めるのはわくわくしますね。

町を西側に通り抜けた先に「⑯遊替（ゆうがい）」という地名があり、これは「要害」が変化したもので、今も山中に砦の痕跡が残っています。長倉城の補助的な役割を持ち、茂木方面から攻めてくる敵に対する砦であったと考えられますが、この戦いではおそらく敵の手に落ちていたのでしょう。

参考文献：1902～1926近藤瓶城 編『史籍集覧．第13冊』「長倉追罰記」